

日刊動労千葉

87.11.19
No. 2706

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五・六（公衆）〇四七二（22）七二〇七

11・29三里塚

今秋最大の攻防戦だ！

三里塚現地は最大の攻防戦を迎えています。
政府・空港公団は、十一月にB・C滑走路本格着工に手をかけようとしているのです。
この間、敵は、機動隊の暴力を頼みに見切り発車の「穴あき」戦術をもって二期工事を推進し、また、脱落派を「呼び水」に小川グループを反対同盟から「脱退」させ、敷地内を「総条件派」におとし入れようとしてきました。
しかしながら、反対同盟は、この攻撃と真正面から対決し、敢然とたたかっています。
「穴あき」工事の進ちよく状況は、執行率十パーセントにしかすぎず、そしてまた、反対同盟の存在する限り、「穴あき」は「穴あき」にしかすぎず、完全完成するメドはたちません。そして、「小川グループ」の脱退に対し反対同盟は、裏切り行為としてキッパリと処断し、ますます強固な団結を打ち固めました。
三里塚闘争は、「軍事空港づくり」に反対し、有事立法で戦争徴用の先どりの攻撃で土地取り上げを体張って実力で対決している反戦・反核の砦であり、動労千葉をはじめとするたかろ労働運動、関西、北富士、沖縄をはじめとする住民運動の最大の結集軸としてある全人民の砦です。
いまこそ、三里塚を守るたかろの山場。11・29現地闘争に、反対同盟の呼びかけに応え、十・一一を上回るたかろとして取り組みましょう！

右翼労働戦線「統一」問題を考える

その3

なぜ鉄労ではなく革マルなのか

すでに見てきたように、全労連結成とは、ただ単に労働の右翼的「統一」という次元の問題にとどまらず、本質的には戦前型の産業報国会同様の存在としての役割を担うものとして結成されようとしている。このことは、総評解体、戦闘的・階級的労働運動の暴力的解体・根絶一掃と同義語である。
全労連結成から九〇年総評解散に至る過程は、戦前の戦闘的労働運動が天皇制テロルと血の弾圧の中で解体・一掃されていった歴史のように、暴力とテロルと弾圧との壮絶な闘いになることは火を見るより明らかである。

また、歴史の教訓から学ばなくてはならないことは、政府支配者階級は官制による「正攻法」型の弾圧の行使のみならず、ある時点においては必ず民間右翼、ファシストを育成・奨励し、そのかし先兵として使うという、これら二つの手法を使い分け結合させ攻撃をしかけてくるということである。

このことを最もよく示しているものこそ、この間の国鉄労働運動破壊攻撃と革マル松崎の演じている役割である。日帝・国鉄当局は従来の鉄労同盟主導に見切りをつけて、国鉄労働運動破壊の強力なパートナーとして革マル松崎を選出し、鉄道労連のヘゲモニーを握らせたのである。

何故、鉄労ではなく革マル松崎なのか、それは御用第二組合的・労働貴族的体質しか持ち合わせていない鉄労には「荷が重い」と判断したからに他ならない。他方革マル松崎には、右翼・ファシストとしての実績と、何よりも既成政党にはな

い類まれな反動的「突撃力（暴力）」が兼ね備わっていると評価したからである。そして、日帝・中曽根の期待に一番にこたえて、昨年七月には総評から脱退するという早業まで演じたのである。今日に至っては勝共連合と手を組み「スト撲滅」「共産主義との対決」「労使の協調」を標榜し、「日の丸労働運動」の積極的推進に手を染めるまでに右翼・ファシストとして純化し、また、現に存在している総評に対しても「総評は消滅した」「敗北してしまつた」と言いなし、総評解体攻撃粉砕の闘いに強い憎悪感と敵対を表明しているのである。

ここまでに純化した革マル松崎・鉄道労連をどうして許すことができようか、粉砕・解体あるのみである。
日共による集票と統一労組懇への組織化へのためのみの火事場泥棒の介入を許さず、総評労働運動の戦闘的再生のために共に闘おう。

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉砕せよ！